

「文理融合」ということ ―ある連歌師の紀行から―

校長 浅田 徹

室町時代の話である。大永二年（1522）、連歌師宗長は駿河国の自分の庵を出て、伊勢を経由して京都へ向かう旅路についた。宗長は宗祇の第一の高弟にして、室町時代後期を代表する連歌師であり、生涯に多くの旅を経験し、その記録はいくつもの紀行文となっている。この時の記録は『宗長手記』の名で知られ、岩波文庫『宗長日記』に収められているので、以下の引用はそれに拠っている。

宗長は尾張から舟で伊勢に向かい、伊勢神宮に参拝の後、秋八月に再び出発、海岸沿いに北上して、鈴鹿越えのルートで京都へ行こうとする。しかし、その途中「雲津川、阿野の津のあなた、当国牟脩のさかひにて、里の通ひも絶えたるやうなり」という障害があることがわかる。「牟脩」は合戦のことで、このあたりの二つの勢力が戦争状態にあったのである。戦場であるから、普通は危険で通行できない。ただ、連歌師は非武装で、時には和平交渉に関与することもあったほどなので、宗長は両勢力のそれぞれに連絡を取り、何とかこの地域を通過することができた。その際、彼は阿野津の思わぬ惨状を目にすることとなる。

「この津、十余年以來荒野となりて、四、五千軒の家・堂塔あとのみ。浅茅・蓬が柚、まことに鶏犬は見えず、鳴く鳥だに稀なり。」

阿野津は伊勢国安濃郡、現在の三重県津市の海岸にあった港湾都市である。室町時代には、九州の博多と並ぶ繁栄を誇った港だった。しかし宗長が通過したとき、ここは草茫々の荒野と成り果てており、四、五千軒の家屋や寺院の塔も「あとのみ」残るといふ壊滅的な状況だったのである。人間がいなければ、鶏も犬もいない。腐肉をあさるカラスすらほとんど見当たらないという廃墟だった。尋常のことではない、何かがこの町を襲ったのである。

さて、この港湾都市を襲ったのは、何だったのだろうか。岩波文庫が刊行された1975年にはわかっていなかったため、文庫本の脚注には何も記されていない（校注者は連歌研究の大家だった故・島津忠夫氏）。その裏にあった事実は、実は古地震学の発展によって明らかになったのである。

明応七年（1498）八月二十五日のこと、東海地方を大地震が襲った。以下の記述は矢田俊文氏『中世の巨大地震』（2009、吉川弘文館）に拠らせて頂くが、地震の規模を示すマグニチュードは8.2～8.4だったと推定される。そして極めて広範囲に巨大津波が襲来した。古記録によると「伊勢・三河・駿河・伊豆、大浪打ち寄せ、海辺二、三十町の民屋ことごとく溺水、数千人命を没す」と言う。伊勢国だけで数千人の命が失われたとする記録もある。繁栄を極めた阿野津はこの津波の直撃を受けたのである。宗長が「四、五千軒の家・堂塔あとのみ」と言っていたのは、家や塔頭の基礎だけが残ри、家屋が引き波でさらわれていった跡の様子だったのだろう。東日本大震災の後、我々も目にした、あの風景である。

この時の地震（明応地震）は、いま我々が言う「南海トラフ地震」そのものである。津波被害は現在の三重県だけでなく、静岡県や和歌山県の沿岸でも甚大で、浜名湖付近の港湾都市、橋本宿も壊滅している。宗長の紀行文は、その貴重な記録だったのである。

しかし、巨大津波の被災地とはいえ、宗長が阿野津を通りかかったのは、地震から24年も経った後のことだ。その間、なぜ部分的にでも復興ができなかったのだろうか。もちろん、規模の大きな港湾施設が破壊されてしまったら再建は困難だったかもしれないが、宗長の記録からは別の要因があったことも推測できる。それは、戦争である。前述の通り、このあたりでは「牟脩」が絶えなかったと記されていた。戦争が民衆の暮らしの再建を阻む最大の要因であることは、現在の世界を見ても明らかなことであろう。現在の研究に拠れば、この港湾が（おそらくは位置を移して）復興したのは地震から五十年も経ってからであった。

宗長の記録によると、彼はこのあと「阿野の津を退きたる里」(阿野津から少し内陸に入った場所にある里)に逗留したが、その宿は「塩屋のやうなる筍茸き」の小屋で、高名な連歌師が宿泊に借りるような家ではなかった。それは、その里自体の貧しさを推測させる。そしてそこには阿野津の人々が住んでいた、とある。今の言葉で言えば、それは津波被害を逃れた人々が仮住まいをする「仮設住宅」の集落だったのに違いない。住人たちは宗長の到来を知り、「ぜひ一緒に連歌を」と懇願した。宗長は承諾して、共に百韻連歌を巻くが、その発句(宗長自身の作)を彼は書き残している。

「帰る世を待つやしら波秋の海」

この発句に宗長は「この里、もとの津還住のあらまし事なるべし」とみずから注している。仮設の集落から、もとの港町に還って暮らしたいという住人たちの希望を代弁したのだ、という意味である。津波が来たとき子どもだった者はすでに壮年になり、親たちの世代の者は老年を迎えていただろう。しかし彼らはなおも、もとの町に戻りたいという願いを失わなかったことがわかる。宗長の発句の「帰る世を待つ」は「いつか帰れる時を待っている」ということ、「しら波」には「知ら(ず)」が掛かって「その時はいつになるかわからない」ということであろう。白波の立つ秋の海が眼前には広がっている。地震が起きたのも秋のことだった。その海には、住人たちの家族や知己が数知らず引き去られていったはずである。発句の「白波」には、津波の映像も重ねられていたのかもしれない。

宗長は住人たちの思いを共有し、彼らと共に百韻という一つの作品を作り上げた。東日本大震災の後、多くのアーティストたちが被災地を訪れ、無償の活動を続けたことは記憶に新しい。宗長はここで、被災者たちと共にアート・パフォーマンスを行ったのである。

『宗長手記』が何を言っていたのかを我々が理解するには、古地震学の綿密な研究の助けが必要だった。サイエンスの力を借りなくては、わからないことがあるのだ。しかし同時に、いくら地層の痕跡を調べても、被災者たちの心情が読み取れるわけではない。復興を望む人々の思いを戦争が踏みにじっていったことも、わからないだろう。そして、その場所でアートに何ができたのかも、知ることはできないはずである。事件は人間の社会の中で起きている。科学も、文学も、歴史学も、芸術学も、すべてが動員されるべきだ。

ちなみに『方丈記』にも、京都を襲った大地震の有名な記事があるが、ほかに養和年間(1181-1182)の大飢饉の描写もある。春・夏は旱天、秋・冬は大風や洪水が続いたと鴨長明は記しているが、例えば福井県水月湖の湖底から採取された年縞の一年ごとの分析から、具体的な気候変動が文献と付き合わせられたりはしないのだろうか。もちろん福井県と京都府とは気候が違はずだが、『方丈記』は不作が全国的なものだったと証言している。年縞の研究者は、文献が残っているような新しい時代のサンプルには興味がないかもしれないが、もし大飢饉につながる異常気象が年縞で確認できれば、その特徴を指標にして、逆にいつ飢饉が起きていたか、文献に拠らずリストアップできるかもしれない。それは政治史・経済史の動向と深くリンクする可能性がある。

「文理融合」とは、ただ文系科目と理数系科目ができることではないだろう。高校生には、あらゆることに興味を持ってほしいと思うし、高校はそれが可能になるような環境を備えるべきである。